

小美玉市の歴史を知ろう④

江戸時代の水運①

水戸から江戸まで荷物を運ぶ

現代社会では、「もの」を輸送する手段は、その用途に応じて、飛行機、船舶、鉄道、トラック輸送などいろいろな手段があります。それが、江戸時代ではその様相はかなり変わっています。もちろん、江戸時代には、エンジンなどの動力はありませんので、輸送手段は、人、馬、

荷車、船などに限られます。江戸時代に整備された水戸街道を使って、一頭の馬に荷物を背負わして運送する場合は、距離は一日20km、重さにして120kgが限界でした。水戸―江戸間は約120kmの距離がありますから、6日間かかる計算になります。現在では、水戸駅―上野駅

は、普通電車に乗ると二時間ほどで到着できます。

慶長十四年(1609)に水戸

藩が成立してからは、藩の江戸屋敷で消費される米などの日用品は、江戸近郊だけでは、賄いきれなくなり、藩内から輸送する方法が必要になりました。馬を使った陸路で大量の荷物を輸送することは、非常に効率も悪く困難でした。一方で、船舶を利用した水運が大量輸送には向いていました。ただ、水戸から江戸まで船舶で輸送する場合、

那珂川から鹿島灘に出て、銚子沖、外房を経由して東京湾に入るルートは安全な航行が困難でした。その理由は、鹿島灘は、単調な海岸線であり、寄港地がないこと、銚子沖には、岩礁が多く当時の航海技術では航行が難しいことが挙げられます。

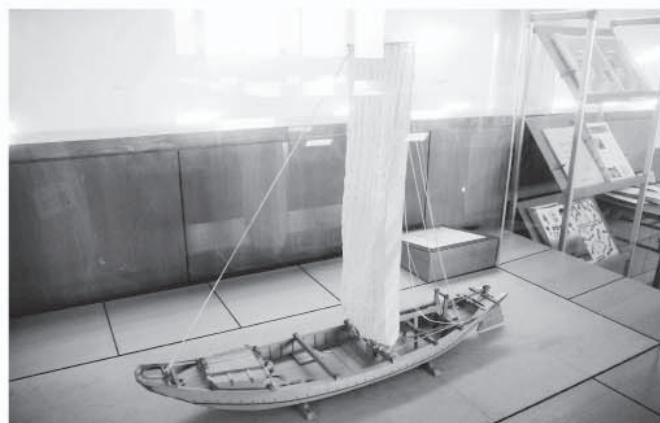
幕府は、治水、新田開発、水上交通網の整備などを目的として、現在の銚子市にて太平洋へと流れる

川に改修しました。これを「利根川東遷事業」と言います。この事業により、内水面を利用した航路が確立されました。水戸からの江戸までの主な航路は、水戸から那珂川を下り、那珂湊の手前から溜沼川に入り、溜沼湖畔の海老沢、網掛で荷揚げして、小川河岸もしくは下吉影河岸まで陸路にて輸送しました。

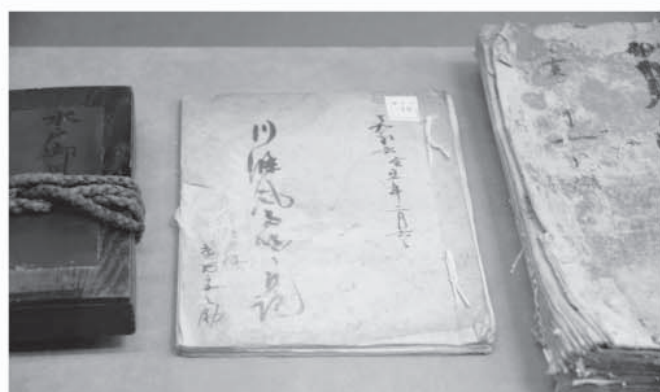
小川河岸からは、園部川を経由して霞ヶ浦、下吉影河岸からは、巴川を経由して北浦に入りま

す。その後、利根川を遡り、関宿(千葉県)から江戸川に入り、江戸に至るルートがあります。幕末に記された船頭の日記によると、出航して串挽(銚子市)から江戸小梅の水戸藩下屋敷まで、14日(帰路は12日)で到着しています。

このような内水面を利用した水運では、高瀬船と呼ばれる川船が使用されました。この船は、大小さまざまですが、大きいものになると全長25m程度で、



高瀬船



船頭の航行日記(川風雨泊日記・菅田家文書)



水戸藩御用の旗印
(大山轟氏所蔵・小川資料館寄託)

500石(7.5トン)の米を積み込むことができました。現在でいうと大型トラック並みの積載量になります。この船は水深が浅い河川なども運行するため、船型は扁平で細長く、船底の形状は平らにつくられました。200石積みの中型高瀬船は、船頭と水主3人の合計4名で操縦しました。風がある時は帆を広げ、風がない時は左右両舷2人分かれて、竹ざおを水中に差しながら船を進めました。水戸藩御用船に乗船した船頭たちは、「丸に水」と染められた旗印を掲げて、水戸藩御用の誇りと威厳をもっていました。

(つづく)

【小美玉市教育委員会
生涯学習課 26-9111】

〈今回の掲載は3月号です〉